

〈研究ノート〉

## 社会福祉および教育福祉の場への音楽的支援について —大学における授業実践の報告—\*

中山 裕一郎\*\*

### はじめに

2016 (平成28) 年 4 月より、立正大学社会福祉学部において「社会福祉／教育福祉の最先端」という授業科目を担当することになった。福祉を専門にしては来なかった私が、そのような科目を担当することに幾分かのためらいはあった。私の専門領域は音楽教育学であり、これまで主に教員養成課程における音楽科指導法や近現代における日本の音楽教育史研究をおこなってきた。同僚教員に問い合わせたところ、授業は教員の持ち回りで、教員各自の専門領域から福祉に関わる話をしてくれればよいとのこと。ここで私自身、これまでの自分の経験をあらためて振り返ってみた。たしかに「福祉」を掲げた授業はおこなっては来なかったものの、これまで担当してきた授業やゼミナールの中で、福祉の重要性については触れてきている。また、教職課程の中に必修科目として位置づけられることになった「総合演習」<sup>1)</sup>では学生たちと地域の特別養護老人ホームや病院などでコンサート活動も毎年おこない、その他、地域の老人集会所や公民館などの要請に応え、主に高齢者を対象とする講座を数多く担当してきた。このような大学外の講座への出講のきっかけは広島県内の大学に勤務していた20年ほど以前にさかのぼる。当時、私自身の居住していた地域（現在の東広島市河内町）の役場から、保健師と一緒に中山間地域の老人集会所などを回り、リクリエーションとして歌を歌わせてもらえないかという内容の依頼があった。河内町に点在する集会所に集まった高齢者の方々（多くの場合10数名規模）に対し、同行した保健師が血圧を測定し、日常生活や食事などの健康指導を最初におこなう。その後に私が歌集を配り、主に唱歌や童謡を歌ってもらう。当然ながら老人集会所に伴奏のためのピアノなどなく、伴奏は車に積み込んで運んだアコーディオン或いはギターであった。そのような地域への「出前講座」の活動は、2001 (平成13) 年の4月から長野県内の信州大学に

---

\* Music Support for Social and Educational Welfare: Report of My Teaching Practice at University

\*\* Yuichiro NAKAYAMA 立正大学社会福祉学部子ども教育福祉学科特任教授

キーワード：社会福祉、高齢者福祉、音楽的支援、伴奏楽器

移ってからも続いた。信州大学では地域連携を重視し、「出前講座」という名称で地域支援のための取り組みをおこなっていた。私の場合の出講先は主に公民館主催の高齢者大学で、出講の回数は年に数回、多いときは10回を超えた。これらの活動は、幅広い福祉活動の中の、高齢者福祉、地域福祉、社会福祉として位置づけることが出来るのではないかと思う。以上のような私自身の経験を、授業の場を通じて学生たちに伝えることはそれなりに有益であり意味があると考えようになった。一方、大学の授業や業務の合間におこなって来たこれらの活動を、授業をおこなうことを通じて総括し直し、福祉としての活動との関連を明確にしたいという思いもあった。以下は、「社会福祉／教育福祉の最先端」という授業名でおこなった全15回の授業のあらましであり結果である。随時必要性に応じて修正を加えながらおこなったものであり、当初シラバスに記載した内容とはやや異なっている点もある。学生は社会福祉学科と子ども教育福祉学科の3年次生・4年次生あわせて約80名である。授業の内容は下記の通りである。

- 1) オリエンテーション（社会福祉、教育福祉とは何か？福祉の現場への音楽的支援の意義について）
- 2) 高齢者 DVD『パーソナル・ソング』の視聴(1)
- 3) DVD『パーソナル・ソング』の視聴(2)（感想と意見交換）
- 4) 音楽療法の記録（『ノードフ・ロビンズ音楽療法ビデオ』）の視聴
- 5) 音楽療法の記録（『ノードフ・ロビンズ音楽療法ビデオ』）の視聴及び感想・意見交換
- 6) インタビュー課題（「私にとっての一曲（パーソナル・ソング）」調査）の報告
- 7) 高齢者福祉への音楽的支援の現場と課題（授業者自身の実践と経験を通して）
- 8) 音楽療法に関わる文献の講読と意見交換及び討議(1)
- 9) 音楽療法に関わる文献の講読と意見交換及び討議(2)
- 10) 福祉現場への音楽的支援の方途(1) 歌唱を中心とした活動のためのレパートリーづくり
- 11) 福祉現場への音楽的支援の方途(2) 音楽理論の基礎とコード・ネーム
- 12) 福祉現場への音楽的支援の方途(3) 伴奏楽器の扱い～ギター～の構造と操作～
- 13) 福祉現場への音楽的支援の方途(4) 伴奏楽器の扱い～アコーディオンの構造と操作
- 14) 福祉現場への音楽的支援の方途(5) 伴奏楽器の扱い～オート・ハープの構造と操作
- 15) まとめ

## I. 授業の記録

### 1) 2つの映像記録の視聴

初回の授業では、高齢者福祉や音楽療法の現場で音楽がどのように扱われ、どのような成果を上げているかについて、私自身の経験を含め話した。また、そのためにどのような音楽的力量を形成すべきであるのかについても触れた。授業の後半で扱う予定にしていた伴奏楽器としてのアコーディオンも教室に帯同し、その伴奏で学生たちの知っている唱歌「故郷」など2～

3曲を歌った。音楽が福祉や医療の分野できわめて大きな役割を果たしているにもかかわらず、未だに医療の保険点数の対象にはなっていないこと。そのため、病院などの現場に正規の職員として位置付くことを阻んでいることなどについても話した。

第2回目及び第3回目の授業では、『パーソナル・ソング』<sup>2)</sup>というDVDを視聴した。2014年12月に公開された映画『パーソナル・ソング』は、アメリカで500万人、日本で400万人と言われる認知症の患者に、音楽を聴かせることによって劇的な変化をもたらされた様子を紹介したドキュメンタリー映画である。サンダンス国際映画祭ドキュメンタリー部門で観客賞も受賞した同映画は、劇場公開の後も各地で上映会がもたれ、各種メディアでも取り上げられ大きな話題にもなった。たとえば介護施設に入居するひとりの高齢者の女性がいる。彼女は若い頃の記憶をまったく思い出せないが、思い出の音楽を聴かせると突然饒舌に過去を語り出す。歩行器なしでは日常生活がおぼつかない別の男性入居者は、懐かしい音楽を聴かせるとリズムに合わせて踊り始める。このように音楽を聴かせただけで驚くほどの変化を見せる認知症の高齢者たち。その姿を目の当たりにした監督マイケル・ロサト＝ベネットは、3年の月日をかけて丁寧な取材を重ね、この作品を完成させている。薬ではなく、音楽の力で認知症患者の心の目を覚醒させ、人生の喜びと、人との繋がり、活力とを取り戻すことは可能なのだというメッセージがそこには込められている。彼が追うのは音楽療法プログラムを普及させるために奮闘を続けるダン・コーエン氏の姿であり、高齢者の尊厳がないがしろにされる現代アメリカの社会の現状でもある。解説を加えながら同映画を授業の場で視聴した。全編は78分。上映は2回に分け、2回目は視聴後の感想を口頭で述べさせた。

続く第4回目及び第5回目の授業では、いわゆるノードフロビンス音楽療法を取り上げ、市販されたVTR(『ノードフ・ロビンス音楽療法ビデオI [入門編]』<sup>3)</sup>ニューヨーク大学ノードフ・ロビンス音楽療法センターで行われた自閉症など様々な障害を持つ児童を対象とした12の個人・グループセッションの抜粋)を視聴させた。「創造的音楽療法 Creative Musictherapy」と呼ばれる同療法は、アメリカの作曲家・ピアニストのポール・ノードフとイギリスで訓練を受けた特殊教育家であるクライブ・ロビンスにより開発された即興演奏を用いた個人・集団療法へのアプローチである。発達障害児や自閉症児などに対して、セラピスト(音楽療法家)がその子の特徴と反応の様子を見極めながら、ピアノで自在に即興演奏してその子どもと音楽的な関わりを結んでいく。また、子どもに呼びかけるような歌を即興で歌ったりもする。セッションを進める上で重要な役割を果たすのが、セラピストを音楽面で支えるコ・セラピストの存在である。コ・セラピストは、セラピストと障害を持った子どもの様子を見ながら、セッションを音楽面(主にピアノ)でサポートする。楽器(太鼓やベル、その他)のできる子には楽器を持たせる。そうでない場合は声や歌で。ただ泣き叫ぶ声や手足を揺すぶる動作でさえ、セラピストとコ・セラピストはそれにテンポや調子を合わせたり、伴奏をつけたりして子どもの表現を受け止め音楽で会話する。何の音楽教育も受けた経験の無い子どもが、たまたま拳でピアノの鍵盤を叩いたなら、セラピストたちは発せられた音やリズムをすくい取り、それを音楽に作

り替えていってしまう。それは、ジャズの「フリー・インプロヴィゼーション」に似ている。そのようなセッションを重ねるうちに、子どもに変化が見られるようになる。外部に全く関心を示さなかった自閉症の子どもが、音による会話を通じて他人の存在を受け入れるようになったり、注意散漫気味の子がすばらしい集中力を発揮して合奏するようになったりもする。『パーソナル・ソング』を取り上げたときと同様、視聴は2回に分けておこない、視聴後は学生たちに感想を述べさせた。

以上、2本の映像は音楽を専門とするのではない社会福祉学部の学生たちにも、音楽の持つ大きな力への驚きと感動とをもたらしたようである。そしてこの2本の映像から、学生たちに2つの課題を提示し、実行させた。ひとつが『パーソナル・ソング』視聴後に出した課題であり、もうひとつが映像を視聴後の感想文の提出である。以下、その内容について触れておきたい。

## II. 「私にとっての一曲（パーソナル・ソング）」インタビュー調査の実施

### 1) インタビュー調査の概要

記録映像『パーソナル・ソング』視聴後の第3回目の授業で、学生に対し「質問票」〈資料1〉を配布し、身近な人たちに「私にとっての一曲（「パーソナル・ソング」）のインタビューをおこない、2週間後の授業時に報告書を提出する課題を出した。「質問票」配布時、以下のような内容を口頭で伝えた。

- ①誰にでも（映画『パーソナル・ソング』のような）大切な一曲があるのではないかと両親、祖父母、或いは年長の知り合いの方にインタビューし、その一曲を報告すること。
- ②配布した「調査票」に従ってインタビューをおこなうが、インタビューの形式は問わない（面談でも電話或いはメールによるものも可）。
- ③できるだけその歌について調べ、その歌の流行していた時代背景について知ること。

説明の際に補足資料として、『ふれあいケア』（全国社会福祉協議会発行）誌に3年間にわたって連載された記事「もっとグッドコミュニケーション」<sup>4)</sup>のコピーを一部配布。配布したインタビュー用の「質問票」は下記の通り（表1）。

「調査票」は第6回目の授業において回収。回答者数などは下記の通り。

1) 回答者数：79（男性28 女性51）\*79という数字は、授業履修生と同数である。

2) 世代別回収数及び男女数の内訳：

〔40代〕18（男性5、女性13）

〔50代〕40（男性13、女性27）

〔60代〕9（男性6、女性3）

〔70代〕4（男性1、女性3）

〔80代〕8（男性3、女性5）

総計79（男性28、女性51）

\*直接或いは電話などで親に質問した学生たちが多かったようである。学生たちの親の世代である現在40代と50代の回答者を合計すると58人となり、全体の7割強(73.4%)を占める。インタビューは直接の対面実施による他、メールや電話などによってもおこなわれた。

〈資料1〉

「社会福祉の最先端／教育福祉の最先端」2016

私にとっての一曲（「パーソナル・ソング」調査票）

回答者プロフィール

1. 性別（男・女）
2. 世代（40代・50代・60代・70代・80代・90代）
3. 出身地：
4. 現在の居住地：

質問項目

あなたの人生にとってもっとも大切な歌は何ですか？或いは、あなたが人生の最後を迎えるときに聴きたいと思うであろう歌をあえて挙げるとすると、それは何ですか？一曲だけ挙げて下さい。

1. 曲名：「                    」
2. その歌はどのようにして知りましたか？
3. その歌を知ったとき、あなたは何歳くらいでしたか？  
（    歳くらい）
4. その歌が好きな理由は何ですか？

（調査日）2016年 月 日

（記入者）学籍番号・氏名：

3) 回答内容：曲目（各世代別に回答のあった曲目を列記。）〈資料2〉参照。

回答のあった曲目は学校唱歌から歌謡曲（J・ポップ）、さらに讃美歌まであり、内容は多種多彩である。<sup>5)</sup>また、各世代の特徴も現れていると言えよう。回答者がこれらの一曲を挙げた理由を見ると、「（歌手の）声が好き」、「メロディーがきれい」「懐かしい」、「歌詞に共感」、「カラオケで褒められた」（80代男性「コモエスタ赤坂」）、「阪神ファンだから」（60代男性「六甲おろし」）などさまざまであったが、もっとも多かったのは、「励まされる」或いは「元気になれる」だった。回答数は17（21.5%）である。これは文字（言葉）として明記（明示）された数であ

るが、「懐かしい」「子ども時代の楽しい思い出」「恋愛していた時に流れていた」などのポジティブな意識感情を含めると、6割を超える数字になる。

〈資料2〉

世代	性別	曲 目 (括弧内はアーティスト名など。数字は複数回答のあった場合を示す。)
40代 (18)	男 (5)	「故郷」(文部省唱歌), 「年下の男の子」(キャンディーズ), 「乾杯」(長瀬 剛), 「もう一つの土曜日」(浜田省吾), 「浪漫飛行」(米米 CLUB)
	女 (13)	「時代」(中島みゆき), 「世界に一つだけの花」(SMAP), 「夢をあきらめないで」(岡村孝子)(2), 「シーズン・イン・ザ・サン」(TUBE), 「木綿のハンカチーフ」(太田裕美), 「何度でも」(Dreams come True), 「アフリカ」(TOTO), 「J」(角倉有希), 「TRUE LOVE」(藤井フミヤ), 「さよなら」(オフコース), 「思い出のアルバム」, 「Everything」(MISIA)
50代 (40)	男 (13)	「故郷」(文部省唱歌)(3), 「TSUNAMI」(サザン・オールスターズ)(2), 「未来予想図Ⅱ」(Dreams come True), 「MARIONETTE」(氷室京介), 「見上げてごらん夜の星を」(坂本九), 「今日までそして明日から」(吉田拓郎), 「明日にかける橋」(サイモンとガーファンクル), 「川の流れのように」(美空ひばり), 「愛は勝つ」(KAN), 「マイレヴオリューション」(渡辺美里)
	女 (27)	「時代」(2), 「TSUNAMI」(サザン・オールスターズ), 「未来予想図Ⅱ」(Dreams come True)(2), 「世界に一つだけの花」(SMAP), 「地上の星」(中島みゆき), 「ジョリー」(オリビア・ニュートン・ジョン), 「アメイジング・グレイス」(讚美歌), 「365日の紙飛行機」(AKB48), 「栄光の架け橋」(ゆず), 「糸」(中島みゆき), 「壊れかけのRadio」(徳永英明), 「SAKURA」(いきものがかり), 「どんときも」(楨原敏之), 「キラキラ」(小田和正), 「なごり雪」(イルカ), 「イエスタデイ・ワンス・モア」(カーペンターズ), 「アナザースカイ」(薬加瀬太郎), 「赤いスイートピー」(松田聖子), 「ひこうき雲」(荒井由実), 「LA・LA・LA LOVE SONG」(久保田利伸), 「さくら」(森山直太朗), 「ガンダーラ」(ゴダイゴ), 「負けないで」(ZARD), 「卒業写真」(荒井由実), 「ピアノ協奏曲」(チャイコフスキー)
60代 (9)	男 (6)	「故郷」(文部省唱歌), 「TSUNAMI」(サザン・オールスターズ), 「ラヴ・ミー・テンダー」(プレスリー), 「神はわがやぐら」(讚美歌267番), 「六甲おろし」(阪神タイガース応援歌), 「大空と大地の中で」(松山千春)
	女 (3)	「愛燦燦」(美空ひばり), 「木綿のハンカチーフ」(太田裕美), 「人生いろいろ」(鳥倉千代子)
70代 (4)	男 (1)	「青山山脈」(藤山一郎)
	女 (3)	「故郷」(文部省唱歌), 「ドナドナ」(ジョーン・バエズ他), 「孫」(大泉逸郎)
80代 (8)	男 (3)	「コモエスタ赤坂」(ロス・インディオス), 「北の旅人」(石原裕次郎), 「かえり船」(田端義夫)
	女 (5)	「故郷」(文部省唱歌), 「ハナミズキ」(一青窈), 「きよしのズンドコ節」(氷川きよし), 「大阪ラブソディー」(海原千里・万里), 「愛燦燦」(美空ひばり)

さて、ここに示された結果だが、「調査」は科学的にコントロールされ準備されたものではなく、学生たちによる聞き書きレポートである。世代別の標本数もコントロールされてはおらず、インタビューの方法もすべて学生たちに任せた結果である。しかしながら、興味深い報告も数多くあった。たとえば「シーズン・イン・ザ・サン」(TUBE)を好きな一曲として挙げた40代の母親はその理由を、「夫と初めて出会った時に、車の中で流れていた。自分(\*母親自身)と夫が知り合うきっかけになった曲だから。」と述べている。また、「LA・LA・LA LOVE SONG」

(久保田利伸) を挙げた50代の母親も、その歌が自分にとって大切な1曲である理由を、質問者である娘に対し次のように述べている。

「当時のTVドラマの主題歌だった。子どもが3人生まれてパパとも仲良く、一番幸せな時期だったから(今でも幸せです)。」

「地上の星」(中島みゆき) を挙げた50代の父親はその理由を娘に対し次のように述べている。「働き盛りで、仕事も家庭も大変だったが、(NHK・TVの)『プロジェクトX』とこの曲を聴いて頑張れた。」

それぞれの「パーソナル・ソング」が、それぞれの個人史と密接に結びついていることが分かる報告であった。報告の内容から読み取れることは幾つもあるが、実施した意味や成果として以下のような点が挙げられるように思う。

1. 若い学生たちが、異世代の音楽文化を知る機会となった。
2. 回答者それぞれが、歌によって励まされたり、生きる上で大切な個別の一曲(パーソナル・ソング)を有していることを知る機会となった。
3. インタビューという行為自体が、父母や祖父母や身近な人々と歌を通して交流する機会となった。

### Ⅲ. 音楽療法に関わる文献の講読

現在、医療の現場に音楽はどのように利用されているのだろうか。また、課題はどのような点にあるのだろうか。この点についての知見を学生たちに伝えることを目的に、第8回目及び第9回目の授業では、医学系雑誌に掲載された論文を取り上げ、全員に講読させた。文献は『成人病と生活習慣病』の特集号で、特集のタイトルは「医学における音楽療法はここまで来た」。<sup>6)</sup> 雑誌の巻頭には「今、なぜ音楽療法なのか—その現状と未来」と題する2人の医師と障害者教育及び音楽療法を専門とする土野研治氏の3者による鼎談が組まれている。医学・医師の立場、一方の教育及び音楽療法の立場からの3氏の議論はとても興味深い。鼎談の内容の骨子は、1) 医療の現場で音楽療法が大きく認知され、その効果についての認識が広まり深まっていること。2) その音楽療法に対しての医師、音楽家それぞれの立場からの見解。3) 日本と海外における音楽療法の方法上の異同、音楽療法士とは何か……等。医師と音楽療法の専門家との間で議論の分かれる点の一つに、音楽療法の効果のエビデンス(Evidence)の問題がある。エビデンスとは、効果の根拠や証明である。鼎談の中では、音楽療法の効果に対する認識は広まり深まってはいるものの、音楽療法の活動は、エビデンスの面でやや弱いと語られる。たしかに薬の効果や治療成績が明白な数値として示される医学の分野と比べると、音楽療法の分野はやや弱いと言えるだろう。この点について音楽療法士として活躍している岡崎香奈は、特集における収録論文の一つである「音楽療法の歴史と意義」<sup>7)</sup>の中で、数値化された「客観性」だけがたしかに「エビデンス」なのだろうかとの疑問を投げかけ、「ケーススタディ」の重要性について考えを

述べている。岡崎論文についてはコピーを学生に配布し、「エビデンス」は必要であるが、それを巡る立場の違いが、未だに音楽療法の医療機関における保険点数化を阻んでいる要因の一つであることなどを伝えた。この他、同特集の中から、東海大学の志水哲夫・近藤真由による「音楽療法を科学する～東海大学の音楽療法の教育～」<sup>8)</sup>論文についてもコピーを配布し、講読させた。志水・近藤による論文は、さまざまな疾病に対しての音楽療法の効果についての報告である。論文では、「透析患者に対する音楽療法の有用性」や「パーキンソン病における音楽療法の不安軽減効果」などについての研究成果が記されている。

#### IV. 福祉の現場への音楽的支援の準備のために

第10回から第14回までの計5回の授業では、福祉の現場（ここでは主に高齢者福祉，地域福祉を想定）での音楽的支援に有用な知識と伴奏楽器の奏法などについて扱った。

##### 1) 曲目の選定

福祉の現場で一般的におこなわれる音楽活動の大半は歌う活動である。では、どのような歌を準備したら良いのだろうか。第10回目の授業では、筆者自身が実際の高齢者大学での講座のために作成した歌集に収録した楽曲を提示しながら解説をおこなった。歌集（『歌の葉』）に収録した歌の曲名は以下の通りである。（作詞者名・作曲者名は省略）

〈目次〉		
1 「カチューシャの唄」	14 「白い花の咲く頃」	27 「あの素晴らしい愛をもう一度」
2 「ゴンドラの唄」	15 「雪の降る町を」	28 「四季の歌」
3 「船頭小唄」	16 「母さんの歌」	29 「神田川」
4 「浜辺の歌」	17 「知床旅情」	30 「卒業写真」
5 「赤とんぼ」	18 「上を向いて歩こう」	31 「青葉城恋唄」
6 「波浮の港」	19 「遠くへ行きたい」	32 「千の風になって」
7 「出船」	20 「見上げてごらん夜の星を」	33 「広い河の岸辺」(NHK・TV 『花子とアン』挿入歌)
8 「山小屋の灯」	21 「学生時代」	34 「私に人生と言えるものがある なら」
9 「里の秋」	22 「忘れな草をあなたに」	
10 「さくら貝の歌」	23 「小さな日記」	
11 「夏の思い出」	24 「白いブランコ」	
12 「あざみの歌」	25 「故郷」(ふるさと)	
13 「北上夜曲」	26 「希望」	

第10回目の授業がおこなわれたのは6月21日。上記の曲目を収録した歌集（『歌の葉』）は、8月3日に予定されていた長野県佐久市公民館主催の高齢者大学での講座のために準備してい



たものである。この講座の対象は180名の「学生」。一昨年、昨年も担当した同講座では70曲あまりを収録した歌集を準備した。講義も含め約2時間の講座ではリクエスト制で歌う曲目を決めたが、実際に歌うことの出来る曲は多くても10数曲である。今年は曲目を昨年のほぼ半分の34曲に絞った。34曲中、もっとも古い曲は1914(大正3)年に発表された「カチューシャの唄」(作詞: 島村抱月・相馬御風/作曲: 中山晋平)。もっとも新しい(放送などの媒体によって広められ知られるようになった時期)曲は2014(平成26)年度上半期にNHK総合テレビとBSプレミアムで放送された連続テレビ小説『花子とアン』の中で歌われた「広い河の岸辺」(原曲は「The Water Is Wide」又は「O Waly, Waly」で、スコットランド民謡)である。公民館長によれば、「大学」への入学資格年齢は60歳以上とされているが、「高齢者」という文字を冠した社会教育の場に足を運ぶようになるのは当該対象者が70歳を迎える頃になってからとのこと。平均年齢75歳という「学生」を想定しての選曲である。流行歌の他には唱歌、童謡そしてフォーク・ソングなどを含めた。ちなみに、音楽科教科書所載の「故郷」(高野辰之作詞・岡野貞一作曲)などの一部の唱歌やTVなどの放送媒体からときどき放送される「千の風になって」(作詞者不詳/作曲・日本語詞: 新井満)等を除き、歌集のほとんどの曲目を学生たちは知らなかった。授業では、高齢者に対する音楽活動を行う上での留意点を挙げ学生たちに伝えた。

## 2) 高齢者に対する音楽的支援活動における留意点と注意点

- ①誰でも知っているスタンダードな曲目の他に、対象者の10～20代の青春期に流行し歌われた楽曲を含める。
- ②伴奏のテンポはゆっくり目に設定の方が高齢者には歌いやすい。
- ③拍節を明確に示し、楽曲やフレーズの冒頭部が明瞭になるよう伴奏上で配慮する。
- ④最高音は2点C(2点ハ音)までに出来るだけとどめ、全体のバランスを考慮しながら、移調などキー(調性)の設定に配慮する。
- ⑤公民館は比較的ピアノを設置している場合が多いが、老人集会所や各種研修施設にはピアノが無い場合が多い。事前に確認する必要がある。ピアノが無い場合、キーボードで代替することは可能。他に、ギター、アコーディオン及びオートハープ等も、伴奏楽器として使用可能。
- ⑥その他 高齢者世代の青春期、壮年期に流行した歌について、或いはその歌が流行した時代背景について知る努力を日常的にすること。

## 3) コード・ネームの理解及び伴奏のための楽器について

上記2)～⑤で述べたように、福祉の現場ではピアノを用いなくて音楽活動を行わざるを得ない場合が多い。第11回から第14回目の計4回の授業では、福祉の現場で音楽による支援を行う場合の具体的な音楽的知識と伴奏の技術面について取り上げた。

### ①楽譜の基礎とコード・ネーム

知られるように、音楽で用いられるコード・ネーム (Chord Name) は和音の略記法である。元々ジャズやポップスの分野を中心に用いられてきたが、今日ではジャズに限らず歌謡曲の楽譜の多くに用いられている。また、学校の音楽教科書や子どものための教材集にもコード・ネームが記載されることが多くなった。和音の根音を英語の音名で記し、長・短、七の和音などの種類をそれに付したものである。記法は根音 (半音上がれば♯, 下がれば♭を付す)、長・短・増・減 (通常長三和音はそのまま短三和音にm., 増三和音にaug., 減三和音にdim. を付す)、七の和音 (短七度はそのまま長七度はM<sub>7</sub>) 等のように。音楽のジャンルや楽器の種類を超えて汎用性があり、とりわけギターや後述するオートハープで歌の伴奏をする際に有用である。このコード・ネームはアメリカにおけるジャズやポップスと分かちがたく発展してきたこともあり、表記は英語である。第11回目の授業では音名と階名の違い、音名における日本 (ハニホヘトイロハ)、アメリカ (CDEFGABC), ドイツ (CDEFGAHC) 各国の呼称と表記法の違いについて学んだ。そして、コード・ネームが英語表記による音名の表記に基づいていることを確認した。その上で、授業ではC, F, Gと言った基本的によく用いられるコード・ネームを取り上げ、説明すると共に、(教室にピアノが設置されていないため) 帯同したオートハープやアコーディオンで音を確認させた。

### ②携行可能な伴奏楽器 3種の構造と奏法

携行できる3種類の伴奏の出来る楽器 (ギター, アコーディオン, オートハープ) を取り上げ、構造と演奏法について解説。また、少しでも多くの学生たちが楽器に触れる機会を作るようにした。

#### 《ギター》

ギターは学生たちにとって比較的身近な楽器であり、音楽系サークルで演奏しているという学生や、親の楽器を譲り受けて弾いているという学生もいた。授業ではギターに関して次の点について扱った。

#### i) ギター各部の名称

ヘッド, ネック, ボディー, ペグ, サドル, トーンホール等ギター各部の名称と役割

#### ii) ギターの種類

クラシックギターとアコースティックギターの違い

～形状, 弦の材質等～

#### iii) 調弦法

#### iv) 奏法

～楽器の構え方と、指による奏法とピック使用による奏法～

#### v) コード・ネームとコードの押さえ方

～C, F, Gのコード～

vi) カポタスト (移調のための補助器具) の使い方

《アコーディオン》

アコーディオン (写真1) は学生たちにとっても身近な楽器である。小学校時代の授業でアコーディオンに触れた経験を持つ学生は多い。しかし日本の学校教育の場で使用されるアコーディオンは日本で開発された左手ベースボタンの無い合奏用アコーディオンである。

本来のアコーディオンは左手ベースボタンを有し、左手で単音や和音を奏でることが出来る。ほとんどの学生たちはこの独奏用アコーディオンについて知らず、たった一つのボタンを押すことによって三和音或いは四和音が得られることに驚いた様子であった。アコーディオンは近年全国的に「復活」したうたごえ喫茶では欠かせない楽器であり、大きな音量が得られるために、野外での歌唱活動の伴奏楽器としても適している。全国で一斉に実施される保育士試験での弾き歌い試験の伴奏楽器はかつてピアノのみであったが、10年ほど前から、ピアノにギターとアコーディオンが加えられるようになった。保育の現場でも有用な楽器であるとの認識が広まりつつある。授業では次のような点について触れた。

- i) アコーディオンの構え方 (立奏と座奏)
- ii) 独奏用アコーディオンの構造
- iii) ベロー (蛇腹) の操作法
- iv) 左手ベースボタンの配列と奏法

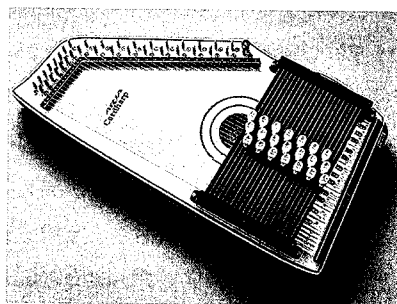
《オートハープ》

オートハープ (写真2) は日本ではあまり知られていない楽器の一つである。19世紀末にドイツで発明され、北アメリカ中心に広まった弦楽器。アメリカではブルーグラス (カントリー&ウェスタン) やフォーク・ソングのバンドでしばしば用いられ、学校の音楽科授業の場においても用いられている。この楽器の良さは、ギターのようにコードをそれぞれ異なった形の指で押さえることなく、片手でコードバーを押すだけで必要な和音を得られることにある。コードバーは押し下げられた時に必要な和音を構成する弦以外をフェルトによってミュート (消音) する。つまり、不必要な音だけが消されることにより、必要な和音を構成する音のみが得られるわけである。オートハープは、その名前にもかかわらずハープとは異なり、むしろツィターの仲間属する。一般名称は「Coded Zither (コード化されたツィター)」である。現在のオートハープの弦数は36本または37本。48本の弦を有するモデルもある。コードバーの数、つまり奏でることの出来る和音の数は多いモデルの場合3列配置で計21ある。単音を選択して演奏することによってメロディーを奏することも可能であるが、一般的には伴奏楽器として和音奏を担当する場合がほとんどである。立奏でも座奏でも演奏が可能である。立奏の場合、左手で楽器を抱え込むように保持し、同時に左手はコードバーを押す。右手はピックまたは指先で弦を弾く。利き手が逆の場合、右手で楽器を保持し、左手

で弦を弾くことも可能である。このオートハープは、障害を持った子どもたちとの音楽活動の場でも用いられることがある。机の上に置いた楽器を挟んで子どもと教師（或いは支援者）が対面し、教師（或いは支援者）はコードバーを押さえながら子どもと一緒に歌う。子どもはピックや指によって弦を弾く動作のみを担当する。片手で弦の上を反復するように前後に動かすことが可能でさえあれば、和音を響かせながら歌を楽しむことが出来る。コードバー操作の習得はギターやアコーディオンほどの時間を要せず、電子音ではないアコースティックな美しい音色を楽しむことが出来る。携行性にも優れ、日本においてももっと普及し、さまざまな場面で活用されて良い楽器だと思う。



(写真1) 独奏用アコーディオン



(写真2) オートハープ

## 終わりに（考察）

本論の冒頭にも記した通り、「福祉」という表現を含む授業の担当は初めての経験であった。授業の前半部分に2つの資料映像を見せたが、その映像は音楽がいかに人間にとって大事なものであり、疲弊した人間を慰撫し回復させるものであるかを示し教えてくれた。場合によっては病院で医師から処方される薬よりも音楽の力はそれに勝る。これらの映像は学生たちにとっても驚きであり、深い感動と強い印象をその心と記憶に残したようである。映像に対する感想レポートを課題として書かせ提出させた、その中からある1人の学生のレポートを取り上げておきたい。レポートのタイトルは「『パーソナル・ソング』と『ノードフ・ロビンズ音楽療法』の映像を見て」である。以下、レポートからの抜粋である。

「音楽療法は音楽の効用を利用した治療法であり目的がある。アセスメントをおこなった上で治療へと進み、実践のなかで音楽を体で感じ、何らかの変化をもたらしていた。認知症患者に音楽を聴かせた時には、表情がとても穏やかになった。音楽によって自分を覚醒させ本来の自分を取り戻していた。たとえ会話が出来なくても、何らかのメッセージを発することの出来る可能性がある。ノードフ・ロビンズ音楽療法（創造的音楽療法）は即興性を重視したアプローチである。この治療法を用い、楽器に触れることを拒否していた少女がセラピストたちと時間

を重ねる中でラポール（\*相互の信頼関係）を築き、楽器、音を媒介して心を開いてゆく過程が映し出されていた。音を体に取り込み、楽しそうに体を揺らしながら、感じたままの素直な感情を表現している様子はとても興味深かった。障害者でも認知症の患者であっても、音楽はすべての人々が潜在的に有するパワーを自然に引き出し、可能性や安らぎを与え、記憶さえもよみがえらせてくれる。（中略）私はデイサービスのボランティア活動を時々おこなっているが、そのときに驚いた出来事があった。それはとても物静かな小柄な男性の利用者が、カラオケの時に別人のように凜として歌い出し、足でリズムを取っている姿であった。笑顔もなく、何となく寂しげな印象とのあまりのギャップに驚き、歌にはこのような力があるのかと感じた。（以下略）

このレポートを書いた学生は一定の社会経験があり、レポートの内容から、現在も重度障害者のための訪問介護をボランティアでおこなっていることがわかる。レポートではこの部分の他に、重度の障害を持つ人々の日常に音楽がどれほど大きな意味と役割を果たしているかについて、経験的に綴っている。他の学生たちもまた、課題に対し、とても真摯で内容の豊かなレポートを提出してくれた。初めて経験する授業だったが、学生たちは授業者の意図を理解し、人間にとって音楽がいかに大切であり、福祉（授業では主にその中の高齢者福祉と障害者福祉）と音楽の関係について学んでくれたのではないかと思う。とはいえ、より良い福祉の実現のために音楽を用いるということは、そこにはそれなりの専門的な音楽的知識や技能が要求される。音楽療法という医療の手段として音楽を用いようとする場合はなおさらである。今回の授業では、その点についても繰り返し強調したつもりである。授業を一つの契機に、学生たちがより深い学びに進んでくれることを期待したい。また私自身にとっても、今回の授業はきわめて有意義な経験であった。そのことを、今後の研究につなげていけたらと考えている。

#### 註

- 1) 1998（平成10）年の教育職員免許法改正により設けられた科目で、2000（平成12）年度入学生から適用。2010年度入学生から事実上廃止される。「総合的な学習の時間」への対応を目的に設置された。学生主体で授業は運営された。
- 2) 『ノードフ・ロビンズ音楽療法ビデオ I [入門編]』ノードフ・ロビンズ音楽療法研究会、VHS、2002年
- 3) 『パーソナル・ソング』（原題「Alive Inside」）、監督：マイケル・ロサト＝ベネット、日本コロムビア提供、DVD、2014年12月劇場公開
- 4) 中山裕一郎：「もっとぐっどコミュニケーション～昭和を歌おう～」(連載全36回)、『ふれあいケア』全国社会福祉協議会、2012年4月～2015年3月 若いケア職員とケアを受ける高齢者とが歌を通じてつながり理解し合うことを目的に、昭和10年代から昭和30年代後半までに流行した歌謡曲計36曲と、その歌についての情報と時代背景について書かれている。
- 5) 一曲だけ「ピアノ協奏曲」（チャイコフスキー）という器楽曲を挙げた回答があったが、この一覧にはそのまま記載した。
- 6) 成人病と生活主観病編集委員会編：『成人病と生活習慣病』第46巻第2号、株式会社東京医学社、

2016年2月15日

- 7) 岡崎香奈:「音楽療法の歴史と意義」同上書, pp.178～181
- 8) 志水哲夫・近藤真由:「音楽療法を科学する～東海大学の音楽療法の教育～」同上書, pp.183～189

#### 参考文献

- 1) 林洋子編:『シルバー・エイジ歌唱集～コミュニケーションをはかる資料付』音楽之友社, 1995年
- 2) 長谷部孝子著『お年寄りの音楽療法実践の手引き～老人施設介護職員・在宅介護の方のための～』, ドレミ楽譜出版社, 1997年(初版1996年)
- 3) 生野里花:『音楽療法士のしごと』, 春秋社, 1998年
- 4) ポール・ノードフ, クライブ・ロビンス共著/若尾裕, 進士和恵共訳:『ポール・ノードフ音楽療法講義—音楽から学ぶこと』, 音楽之友社, 2003年
- 5) C.ロビンス著/生野里花訳:『音楽する人間～ノードフ—ロビンス創造的音楽療法への遙かな旅～』春秋社, 2007年8月
- 6) 佐藤由美子:『ラスト・ソング 人生の最期に聴く音楽』, ポプラ社, 2014年
- 7) American Music Therapy Association (AMTA) のホームページ (<http://www.musictherapy.org/>)